

## 2021年度木岡哲学塾 [春期] : 「哲学とは何か」 ㊦

「哲学」とは何だろうか。「自分のテーマを自分で考え、自分の言葉で表現する」ことである。この考えに沿って、参加者各自が、それぞれのテーマをそれぞれの流儀で考え抜くための実践に取り組む。前半の講義(50分)は、自分で考えるための材料となるテーマ、考え方のサンプルとして、主宰者自身の「風土学」を取り上げ、その内容を紹介する。後半の哲学対話(60分)では、講義内容や各自の疑問に即したテーマを取り上げ、どこまで考えが深められるかに挑む。メンバーが希望する場合には、後半の全体を研究発表・討論に充てることもある。㊦

### 1 「考える」とは? (4.9) ㊦

考える手がかりは、私たちの周りにいくらでもある。何かを考えることと「哲学する」こととは、同じことだろうか。同じでないとしたら、何がどう違うのか。参加者が、それぞれに関心のあるテーマを持ち寄って、議論を繰り広げる「哲学対話」の試み。㊦

### 2 私・世界・人生 (4.23) ㊦

「私はこの世界に生きている」という、ごくごく当たり前の事実がもつ意味を、私・世界・人生という三つの要素に分け、それぞれがいずれも哲学の問いとして、容易に答えの出ない重要な謎を含んでいるということを確認する。㊦

### 3 〈私〉の不思議 (5.7) ㊦

〈私〉とは何ものか? 〈私〉はなぜ、いかにして存在するのか? 人間は昔から、最も哲学的とも言えるこうした問いを、自身や周囲に投げかけ、答えを出そうと努めてきた。この問いがもつ意義を、一人一人が追究する。㊦

### 4 「風土」としての世界 (5.21) ㊦

ふつう「環境」と呼ばれる周囲の世界は、人々の集う社会と自然とから成る。人間と自然が一体になった世界を「風土」と呼ぶ、風土学の基本的な立場を説明して、「世界に生きる」ことの意味を考え直す。㊦

### 5 自己と他者 (6.4) ㊦

私という〈自己〉は、私以外の〈他者〉から独立していて、自己と他者は切り離されて存在する。このような「二元論」の常識が、どのようにして成立したのか、二元論的でない考え方がありうるのか、を検討する。㊦

### 6 〈あいだ〉を開く (6.18) ㊦

自己と他者、心と身体、人間と自然、こうしたものを根本的に区別する二元論に対して、風土学は対立する二者の中間(あいだ)を開く。〈あいだ〉とは何か、〈あいだを開く〉ことが、どうして必要なのかを考える。㊦

### 7 〈出会い〉と〈縁〉 (7.2) ㊦

人と人の〈あいだ〉は、〈出会い〉によって開かれる。出会って、たがいの違いを認め合うと同時に、自他の結びつきを確認することによって、〈縁〉が結ばれる。風土学最大のテーマ〈出会い〉(邂逅)と〈縁〉の意義を明らかにする。㊦

### 8 総括討議 (7.16) ㊦

「哲学とは何か」をめぐって、各自が考え、導き出した答えは、どういうものだったか。それぞれの発見したことや、残った疑問を提出し合い、全員で検討する。㊦

## 2021年度木岡哲学塾 [秋期] : 「時間とは何か」 ㊦

哲学の世界では、古来、「時間とは何か」が根本問題として問われ、論議が重ねられて、今日に至っている。私たちの日常生活でも、「時間とは何か」を直接に問うことはないとしても、時の経過をしじゅう気にかけるなど、時間に注意を奪われ、いわば「時間に支配される」生き方を余儀なくされている。偉大な哲学者たちが論じ続けてきながら、いまなお答えの出ないテーマ—時間。それに答えを提出しようとする意図ではなくとも、参加者がそれぞれ「時間」の問題に注意を向けることによって、それを考えることにどのような意味があるのかを、理解することをめざす。後半の「哲学対話」は、参加者の希望に応じて、研究発表と討論に充てる予定。㊦

### 1 時間と〈私〉 (9.10) ㊦

各自がこれまで体験してきた「時間」の意味を、それぞれの言葉で語り出し、意見を交換する。時間を考えることの意義にふれた人々の発言を手がかりに、それぞれの時間についての理解や疑問点を付き合わせて検討する。㊦

### 2 瞬間と持続 (9.24) ㊦

主宰者が、若き日に取り組んだベルクソン哲学、その中心思想は「持続」。時間の連続を否定する「瞬間」の問題に目覚め、以来、ほぼ半世紀を費やして今日に至った、自身の研究歴を振り返りながら、連続と非連続の関係を考える。㊦

### 3 時間の比較社会学 (10.8) ㊦

人間社会は、それぞれの世界に適合する時間の観念をつくり出し、それに一致する生活を営んできた。直線的な時間、循環的な時間など、古今の代表的な時間観念を取り上げ、それがどのようにして成立したのかを考える。㊦

### 4 近代の時間意識 (10.22) ㊦

科学技術の発達により、空前の「進歩」を遂げた西洋近代世界。その「進歩」は、直線的時間の図式と深く結びついている。現代人の常識の底にある時間観念が、近代に生まれたフィクションであるゆえんを解き明かす。㊦

### 5 仏教の時間意識 (11.5) ㊦

仏教的な「輪廻」に代表される反復的・循環的な時間は、西洋近代の直線的時間と鋭く対立する。仏教にはもう一つ、「刹那滅」と呼ばれる特殊な考え方が存在する。「輪廻」「刹那滅」の考えが、どうして成り立ったのかを明らかにする。㊦

### 6 「瞬間」とは何か (11.19) ㊦

ここまで検討してきた東西の時間観念をふまえ、ほぼ同義とされる「瞬間」と「刹那」の共通点と相違点を明らかにする。両語の意味の重なりと食い違いは、そのまま東西両世界の共通性と差違にほかならないことを示す。㊦

### 7 〈邂逅〉の条件 (12.3) ㊦

東西の時間論を比較して、共通の地平を開くことは、二つの世界が出会う（邂逅する）ために必要不可欠な手続きである。〈邂逅〉の条件となる時空のあり方を、風土学の立場と目的に沿って明らかにする。㊦

### 8 総括討議 (12.17) ㊦

参加者が年間の講義から得た成果や疑問を、それぞれが披露し、今後に向けてのテーマを確認するための対話を展開する。㊦